
夏祭り

国沢裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭り

【Nコード】

N5156C

【作者名】

国沢裕

【あらすじ】

幼馴染のショウゴと、毎年恒例の夏祭りに行く俺。いつも男同士2人で行っていた夏祭りに、今年は女の子と一緒に行くことになった。色気のないレーコに、俺は少々あきれつつ……。

今日は、近所の夏祭りの日だ。去年まで、毎年俺は行っていたのだが、もう高校二年生だ。子供っぽいし、わざわざ出かけるのも億劫だなと考えていると、玄關で叫ぶ、悪友の声が聞こえた。

「タクミ！ もう太鼓の音が聞こえてんぞ！」

俺は、シヨウゴが待っている玄關にのろのろ向かう。

「今日の為に、最近ずっと百円玉を集めていたんだ」

こいつは、いつまでもガキだなあと思いながら、せっせと小銭を貯めていた幼馴染の為に、仕方なく靴を履く。

幼稚園の頃からずっと、夏祭りはこいつと二人で行っている。去年、同じ高校に入学し、一年も二年も同じクラス。いい事も悪い事も、大抵は一緒にしてきた。

外へ出ると、確かに太鼓の音が遠くで響いている。通りにも、まだ明るい時間なのに、夏祭りへ行く人の流れが出来ていた。その流れに、俺達二人も加わる。

「でも、毎年俺ら二人だけって、なんか寂しいよなあ」

俺は何気なくつぶやいた。するとシヨウゴが、俺のその言葉を待っていましたとばかりに言った。

「そう言うと思って、今年は誘いましたよお」

その時、後ろから声がした。

「シヨウゴ君、タクミ君、良かったあ！ 出会えて」

振り返ると、何と、同じクラスのアヤノが立っていた。可憐で社交性もあり成績も優秀な、学年の高嶺の花。そのアヤノが、赤の地に扇子の閉じた柄を上品に配し、黄色い帯をした艶やかな浴衣姿で俺達を見ていた。長めの髪は浴衣の襟首を意識してか、アップに結い上げている。そして手には、浴衣とおそろいの赤と黄色のツートンの巾着袋。

「ショウゴ君、今日は誘ってくれてありがとうねえ。私の住んでいる地域って夏祭り、していないんだあ」

確かにアヤノは、俺達の住んでいるこの地域の高校へ、結構な距離を電車に乗って通学してきている。

すげえ、やるじゃん、ショウゴ！ いいところに目を付けた！

「あとねえ、レーコちゃんも来るんだけど。最初に待ち合わせの約束をしていた場所に、もういると思う」

……確かレーコって、見た目は結構可愛いが、俺の中では、普段から大食いのイメージがある子だ。おいおい、折角なら、もっと色気のある女子、誘ってよ。

待ち合わせの場所にしたという鳥居下の石段に近づくと、先に来ていたレーコが振り返った。薄い水色地に、大きな桃色の花が咲いた絵柄の浴衣。襟首にかかる位に裾をすいているショートの髪の毛の、片方の耳の上に、白っぽい大輪の花がピンでとまっている。

アヤノと並んでも、そう見劣りしない可愛さ。

結構、いいんじゃないか？

「良かったあ！ 会えるかどうか、ドキドキものだったよ」
嬉しそうに言うレーコ。

「早く行こうよ。もうお腹、すいちゃってさあ」

……やっぱり、食い気か。せつかくの薄化粧も台無しだ。

石段を上がった広い境内では、無数の提灯と裸電球が輝いていた。お腹の底に響く太鼓のリズミカルな音。子供達の歓声。屋台で陳列されている玩具や、昔ながらの屋台特有のゲームの音。すべてのものが五感の感覚を鈍らせ、俺を不思議な空間へ誘う。

そんな感覚に浸っていると、早速、俺の服の裾をちょいちょいとレーコが引っ張った。

「ねえ、りんご飴が売ってるよ！」

いきなりで呆れる俺を、その屋台の前に連れて行く。

「うーん、どれにしようかなあ？」

真剣に選んだレーコは、最初にりんご飴と言いつつ、俺の予想をはずして、ちっちゃいイチゴ飴を手を取った。そして、そのイチゴ飴は、この風景の中の浴衣効果をあげる、不思議な小道具にまで見えてきた。

……なんか、レーコが食い物を持っていたても可愛いかも。祭り限定の食い物&浴衣マジック、万歳！

そう思っただけで見ていた俺の視線に気がついたのか、レーコは言った。
「ちっちゃいイチゴ飴にしちゃった。おなかに余裕、作らないと。だって、これからもつと食べたいモノ、沢山あるし」

……そうだね。

りんご飴の屋台に寄ったせいで、ショウゴとアヤノを見失った。

まあ、この道はほぼ一本道だし、そのうちに合流するだろう。俺とレーコは、さすがに手はつながないが、肩を並べて進んで行く。

その間に、焼きそばや焼きとうもろこし、イカ焼きにたこ焼き……。この女、どれだけ焼き物を食べれば気が済むんだ。

「満腹〜！」

呆れ顔の俺と目が合うと、レーコは笑いながら、さらに続けて言った。

「さあデザートは、カキ氷、冷やしパインかチョコバナナ、綿菓子に」

まだ食う気が。

「ちよつと待て」

思わず口に出した俺に、きょとした顔のレーコ。

「デザートを美味しくする為に、ぶらぶら歩いたりして腹ごなし、しない？」

俺の提案に、少し考えるそぶりをみせたが、にこっと笑って言った。

「そうだね」

俺の言葉の中の、どこかの部分かが効いたらしい。
そして早速、縁日の定番、金魚すくいを見つけた。

「これ、やろうか」

俺の言葉に、レーコは嬉しそうにしゃがみこむ。

「私、昔からコレ苦手なんだぁ」

そう言いつつ、受け取ったポイをゆっくり水に沈める。

跳ねる金魚が、すぐに尾びれで紙を破る。

さらに歩いていくと、俺の中で毎年コレは外せないという射的を見つけた。レーコはそばで見ていると、嫌な顔をせずに言うので、俺は、ちょっといい所を見せてやろうと士気が高まる。

そして、お皿に乗ったコルク弾を五つ受け取りながら、俺とほぼ同時にお金を手渡した、隣の男の顔を何となく見た。眼鏡をかけた真面目そうな風貌。確かこいつ、隣のクラスの奴だ。頭は良いが、根暗で無口な変わり者と言う噂を聞いた事がある。そいつも意外な事に、浴衣姿の彼女連れだった。

俺は妙に、闘争心が沸いた。

こいつより、絶対多く落してやる。

早速俺は、弾を一つこめる。隣の奴を何気なく眺めたら、弾を込めた後、何と銃口を下に向け、台に押し付けながら平らにならしていた。こいつ、そこまでやるのか？

俺が次に景品へ目を向けた時、レーコが言った。

「ねえ、あのキャラメルがいい」

……ここまできても、まだ食い物か！ しかもキャラメルって、結構景品の中では重い部類だぞ。などと、心の中で文句を言っても仕方がないので、俺はキャラメルの箱を狙う事にした。

縁日の射撃のお約束。出来るだけ片手で前にのび出し、景品に銃口を近づけて撃つべし！ だが、やはり箱は重く、当たって動いたのに倒れなかった。

二つ目の弾をこめる。

隣の奴はと見ると、いかにも狙撃という構えで狙っている。だが、どれを狙ったのか、何もかすりもせずに弾が飛ぶ。

そいつの連れていた彼女が言った。

「全然当たらないじゃん」

「……一発目は、これの癖の確認」

俺はそいつの返事を聞きつつ、変わり者って噂を再度思い出す。

二発目も当たったが倒れなかった。だからキャラメル重いんだって。そう思いながら三つ目の弾をこめている時、隣の奴の二発目の弾が、景品を落とした。くそ、先を越された！ しかもキャラメル！！ 奴の彼女が嬉しそうに感嘆の声を上げる。

「やったあ！ さすがプロ！」

プロ？ そうか、変わり者って噂、ガンマニアって意味か。俺は、自分の心の中だけとは言え、変な奴に勝負を挑んでしまった。

結局、俺は全部当てたが、一つも倒れなかった。戦利品なし。当たっても倒れないと貰えないのが、この縁日の射的の辛い所。レーコに、いい格好が見せられなかった。

そして、その場から離れようとした時、隣の奴の彼女が話しかけてきた。

「これ、どうぞ」

そして、差し出されたキャラメルの箱、二つ。奴は、その後の四発全てを、キャラメルに当てて落とした。ガンマニアのおたくに情けをかけられ、受け取れるかと思いきや、

「わあ！ ありがとう」

レーコは嬉しそうに受け取った。

……女は、男の中の緊迫感がわからないらしい。

その後、レーコは空クジなしのくじ引きのお店でトランプを当て、

イチゴのカキ氷を食べながら、ご満悦の様子。

「結局、あれからアヤノ達に会えないね」

そう言いながら、レーコが俺の方を向いた時、俺達は、前でたまっていた集団にぶつかってしまった。

「ぶつかったオトシマエ、どうつけてくれるかなあ？」

俺とレーコは明るい電気の下から横の暗がりの場所へ、五、六人のチンピラ集団に引つ張り込まれる。完全に怯えて言葉の出ないレーコに、一人が言った。

「この彼氏とじゃなくて、俺らと遊んでくれるんだよな」

その言葉を聞いた途端、俺は思わず油断している連中の中からレーコを引つ張り、人ごみの方に押し出しながら言った。

「逃げて！」

驚いたように振り返ったレーコは、でもそのまま人の波にのまれた。

……何も考えずレーコを逃がしたが、俺はどうすればいい？

「この野郎、カッコつけてんじゃねえ！」

俺は突き倒され、連中に囲まれた中で尻餅をつく。ドラマじゃ主人公が格好良く大立ち回りでもやるのだろうが、俺は喧嘩をした事がない。ボコボコにされる。そう覚悟をした時、急に連中の表情が変わり、後ずさりをした。

「何だよ！ 仲間がいるなら最初にそう言え！」

そう捨て台詞のような事を言いながら連中は、俺を振り返りつつ人の波に消えて行く。俺は訳がわからず、尻餅をついたまま、周りを見回した。

すると、俺の後ろで、二人の男が並んでこちらを見ていた。一人は眼鏡を外していたが、さっき射的で隣にいた変わり者。もう一人は俺と同じ高校だが、暴走族に入っているという噂の男。俺は、せっかく連中が去ってくれたのに、今度は、こいつらに因縁をつけられるのかと思ってしまった。

だが、変わり者の方は眼鏡をかけなおし、族の方は踵を返す。

……もしかして、こいつらを見て、さっきの連中は逃げたのか？
こいつら、ただ立っていただけだが、俺は助けられた形になるのか？

「お巡りさん、こっちこっち！」

その時、レーコがお巡りさんを連れてきた。連中は逃げた後だったので、俺はお巡りさんにお礼を言う。そして、レーコにもお礼を言った。

「やだなあ。お礼を言うのは私の方だよ。ドラマのヒーローみたく、助けてくれたんだもの」

照れたようにレーコがそう言った時、タイミングよく頭上に、打ち上げ花火が上がった。

……心理学の本で読んだ事がある。

『ドキドキしている時、その時に見た異性に好意を持つ』

遠くの太鼓の響きも聞こえるし、チンピラにも絡まれるし、今は近くで上がる花火の破裂音も、俺の心臓に響いている。

だから俺が今、花火の光で浮かび上がるレーコの横顔に、ドキッとしたのは、きっとそのせいだ。

翌日は、高校の登校日だった。

靴箱の前で、結局あれから合流できなかったショウゴと出会う。

「ショウゴ！ 昨日はどうだったんだよ」

嬉しそうなショウゴが、得意そうに俺に言った。

「まあ、アヤノと二人でデート出来たってだけで、皆より一歩リードって感じたねえ」

そしてショウゴが聞いてきた。

「お前の方はどうなったんだよ。レーコ可愛いだろ？」

「まあ、ぼちぼち」

日が変わると、当然だが昨日のドキドキ感は消えていた。これで今日、レーコに会っても特別に何も感じたりはしないだろう。そう思いながら、教室に向かう廊下を歩いていると、前から一人の男が、

こっちに向かって歩いて来た。

……昨日チンピラが逃げた時、俺の後ろに立っていた、族の方だ。俺は、そいつが前まで来た時、妙な威圧感の為に緊張して下を向いた。ショウゴも関わりを避ける為にか、あらぬ方を向いている。

そしてすれ違う瞬間、そいつが俺の耳元でささやいた。

「身体張って女護るなんざ、カツコイイじゃん」

振り返ったが、そいつは何事もなかったように歩いて行っただ。

何だか、俺は妙に気分が高揚したまま、教室に入る。すると、既に寄り集まって、トランプで遊んでいた女子数人が振り向いた。その中にいたアヤノとレーコも、一緒にこっちを見た。レーコは俺に眼をとめると、照れたように微笑んで、手に持っていたトランプを、ひらひら見せた。

俺の心臓には、もう消えたと思っていた昨日の花火の音が、まだ、しっかりと響いていた。

（後書き）

ここでの、初めての短編アップです。よろしければ評価の方、どうぞお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5156c/>

夏祭り

2010年10月8日14時56分発行